



四季桜 (塩釜神社)

厚生協会だより

2018年1月21日
第 347 号

発行
公益財団法人
宮城厚生協会
〒985-0835
宮城県多賀城市下馬
二丁目13番7号
TEL 022-361-1113
FAX 022-361-1124
発行人：平賀秀法

玉子酒

思い出すのは 母の顔

書初めで

平和の文字が 輝けり

除夜の鐘

七福神も おお仕度



北部診療所ケアマネージャー

佐藤志津子

迎春

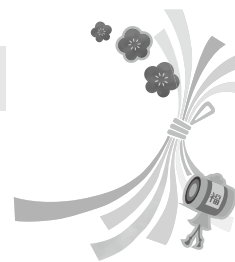




理事長年頭のごあいさつ

自己変革が可能な「新たな土俵」作りの1年目

(公財)宮城厚生協会理事長 小熊 信



皆様、明けましておめでと
うございます。

今年の年始は、年末の寒波襲来に引き続いてあまりすつきりしない天気でした。まるで昨今の不確実で不透明な社会情勢を反映しているかのようです。

昨年は総選挙が行われましたが、野党間の足並みの乱れもあり、自民党による「一強多弱」の政界構図を変えるには至りませんでした。その結果選挙前から続いていた、「現実を理想に近づけていく」という政治本来の理念が軽んじられ、これに逆行するような政治手法がさらに強まることに懸念されます。

医療・介護報酬制度の同時改定の影響

このような政治状況の中で、今年4月に6年ごとに実施される医療・介護報酬制度の同時改定が予定されています。今回の改定では、2025年以降の急速に進む高齢化社会への対応策として、「地域包括ケアシステム」に象徴される「医療と介護の一体化と連携強化」が中核的な政策と

位置付けられています。そして、その前提として医療機関の自発的な機能分化が求められており、国内の医療機関に大きな影響を与えるものとなっています。このことは、社会保障費の削減政策が進められ、医療機関における人件費などの支出の伸びに見合うだけの収入増加が期待できない状況下において、今後地域内での役割と組織内部の主体的力量とが内外の状況とミスマッチした事業に対しては、それに見合うだけの医療収入は提供されず、結果としてそのような事業所は容易に経営危機に陥ってしまうことを示しています。

今般の医療・介護制度の改定は、様々な課題や問題点を内包しながらも、「制度事業を牛耳っている国家」が数十年ぶりに大きな制度改革を行うおうとしているわけであり、それにもかかわらず、私たちがこのような外部環境の変化に対してこれまでの手法を盲従的に踏襲し、何ら「自己改革」をしなければ、国による一連の制度改革の流れに埋没しかねないことを十分認識し

なければなりません。

各職員の「自発的」

「主体的」な関わりが必須

このような外部環境の変化に対する私たちの自己変革の指針として、今期理事会は、「経営構造転換5か年計画」、「泉、古川中長期構想作成」、「人事制度の再確立」の3つの基本政策を2017年初頭に提起しました。昨年は、改革わずか1年目にもかかわらず職員の奮闘により、2014年に顕在化した経営危機に一定の歯止めがかかるまでに経営状態を改善させることができました。改革1年目は、「毎日30万円の資金流出状態」からの一刻も早い脱却が必要であったため、改革の手法は

「トップダウン」的な手法をとらざるを得ませんでした。しかし、持続的な自己改革の組織文化の醸成には、本来各職員による組織への「自発的」「主体的」な関わりが必須であると考えています。このような観点で、本年は「医療・介護制度の大きな転換期」を迎えるにあたって、ボトムアップによる組織改革を通して持続的な自己変革が可能となるような「新たな土俵」作りの1年目にしていきたいと思っています。

法人内の組織改革2年目を迎えて、皆さんの更なる積極的で主体的な「挑戦」と「自己改革」に取り組まれることを期待します。



12月2日(土)の午後、坂総合クリニック8階会議室において、職員や地域住民約80名が参加し、標記テーマで講演会が開催されました。講師の佐藤和賀子さんの話を聴いて新たな事実も含め、多くの事を学びました。

伊達家との関係では仙台藩6代目藩主伊達宗村の側室に坂家の娘、信子が側室となり、7代目の重村の生母となります。伊達家重臣とちなみにこの7代目重村は、映画「殿利



講師の佐藤和賀子さん

講演会

坂琢治・坂定義の思想と業績

「宮城授産場」と「私立塩釜病院」

講師 佐藤和賀子さん

(仙台百百合女子大学非常勤講師)

坂総合病院100年史編纂委員会 渡辺 建寿



坂琢治

琢治は国賊の息子として

息でござる」の藩主役が羽生結弦さんで話題となりました。坂病院の歴史に最初に登場する人物は坂英力です。戊辰戦争が始まると、奥羽31藩が参加した奥羽越列藩同盟で仙台藩の責任者となるも新政府への恭順に一変した藩論の下1869年(明治2年)5月29日仙台藩江戸屋敷で斬首されてしまいます。処刑後は国賊として坂家は一家離散となりました。この英力の次男が琢治、三男が定義です。



坂定義

坂定義 坂病院創設者
坂猶興先生の叔父に当たる

定義は軍医として志願し日清戦争に従軍し、青森第五歩兵連隊の八甲田雪中行軍遭難事件の救助に参加しました。軍医を退官し塩釜で開業し1914年6月14日に、私立塩釜病院を竣工開院しこれが坂病院に直接つながります。地域から大きな信頼があった

様々な制限や圧迫がありましたが、祖母が藩当局から「医師が僧侶になれば赦される」との意向で、医師の道を目指します。陸軍軍医となりその後退官し1898年仙台市で開業します。琢治の医院は最終的には東一番町に移転(今の藤崎の一角)、さらに孤児・貧兒など困窮者収容施設の宮城授産所と付属の養稚園を開設し、医療をはじめ社会福祉活動を進めました。

ことが「記念の碑」に彫られています。定義は社会活動にも積極的に参加し校医や青少年教育活動、社会教育活動や地域経済活動に参加しました。単に病気だけを「みる医者屋にならず」の信念を貫きました。1939年には多賀城村ほか5ヶ村からの依頼で伝染病の隔離病舎も設置し宮城県から賞状も授与されています。1929年には宮城郡医師会長となります。



坂猶興(中央)

猶興はより社会制度改革の意識をもち、1925年東北帝国大学医学部に社会医学研究所を設立し社会変革活動に取り組み2回検挙されます。1932年には無産者医療同盟仙台北支部を結成、定義が1937年に急逝し猶興が塩釜病院の2代目院長となります

す。1939年には「私立塩釜病院」を「坂病院」に改称。1947年には共産党から塩釜市会議員に当選します。1949年には宮城厚生協会を設立。しかし1957年急逝します。

このように坂病院は琢治―定義―猶興と、地域に密着し老人や子供、貧困者など生活困難な人々に目を向けた事業や医療を進めてきました。この思いが今の宮城厚生協会につながることを改めて思いいたる講演でした。ぜひ『坂総合病院100年史』もお読み下さい。



熱心に聴き入る参加者

「何事も最初が肝心」と肝に銘じ次代を担う職員育成に励みたい

坂総合病院放射線室室長 本館 広樹



明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

2018年の抱負ですが、第一に、今年は新人が入職する年なので新人育成を重視して職務に臨むことを掲げたいと思います。放射線部門には内容の充実した初期研修カリキュラムが存在し、新人が入職する毎に専任指導者を配置して充実した研修をこれまでも行なってきました。しかし、いかに質の高い研修カリキュラムであっても指導する立場の者がその内容を十分に理解しなければ最大限の効果を引き出すことはできませんので、そのことを常に意識しながら、多角的に進捗状況を確認し合い「何事も最初が肝心」であることを肝に銘じて次代を担う職員育成に励みたいと思います。

第二に放射線室としての病院経営における貢献度を理解することは部内職員のモチベーション維持とより良い方向への変化が期待できるものと感じていますが、部門別管理データとは違った視点で職責者と業務リーダーを中心に業務分析データを作成し、職場での共有化を図ることで部門の存在意義を再確認すると共に職場の活性化につなげたいと思います。

第三に坂病院放射線室が地域医療の一翼を担う部門としての認知度を更に高められるように法人放射線部門はもとより他の医療施設とも有益な情報交換を積極的に行ない「他から学ぶ」ことを意識しつつ職種間の横のつながりを広げ、地域医療にこれまで以上に貢献できる坂総合病院放射線室を目指したいと思います。

今後とも皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

抱負

病院の事業活動に貢献できるよう微力ながら精進したい

長町病院放射線室室長 佐藤 信



明けましておめでとうございます。旧年中は長町病院放射線室の諸活動につきましてご理解とご協力を頂き感謝申し上げます。

さて、昨年は『平和』を意識させられる年だったと個人的には感じていました。また、日本国憲法の改正論、北朝鮮の行動、アメリカの対応、世界中で起こるテロ行為などの恐怖に負けない自由と平和を選択し生きていきたいと感じています。ICANのノーベル平和賞受賞式でのスピーチは世界各地の市民活動が世界の恐怖に打ち勝ってきたこと、そして、未来の選択肢を示してくれたことに共感しました。これからの民医連活動にも勇気をもたらした出来事でした。

医療放射線利用においては2015年診断参考レベル(DRLS2015)が公表され医療放射線の最適・適正化に努め質の高い放射線診療を責務とし撮影条件や被ばく関連データ、職業被ばくについての管理実務を診療放射線技師が主体的に担っています。ただ現厚生協会のHISでは充分管理できている状況にはありません。被ばく低減認定施設取得や放射線関連のデータ管理を行なうためにRIS(放射線情報システム)導入がこれからの医療活動において更に重要になってくると思います。

長町病院は新築移転し5年目を迎えます。この間、医療接遇や技師の質向上(認定取得等)に取り組み業務に還元してきました。これからも長町病院の事業活動に貢献できるように微力ながら精進して参ります。本年も変わらぬご支援をどうぞ宜しくお願い致します。

「壮にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」を忘れず精進したい

古川民主病院放射線室室長 木村 文正



明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

さて、古川民主病院の放射線室は2名の職場で（細々と）業務をしておりますが、病院として地域包括ケア病床増床や在宅強化などの方向に向かっていく中で放射線業務は健診などの定期検査中心になっています。

2018年の診療報酬改定ではその傾向に拍車がかかることが予想され、古川放射線室として如何にして業務を確立させられるか日々頭を悩ませています。職場として今後大幅な量的向上は見込めないため、経費を抑えながら質の向上を目指すことを掲げて取り組んでいきたいと思っております。施設や機器・機械とともに人間も老朽が進んであちこち痛んできてはおりますが「壮にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」の言葉を忘れずに精進していきます。

個人的には、最近自分の車を手放してから鉄道やバスなどの公共機関に乗る機会が増えました。以前は小銭が面倒で毛嫌いしていた路線バスもICカード導入ですごく簡単でむしろ色々な形式のバスに乗ることができて楽しみのようになっていきます。仙台―古川間も新幹線より高速バスが快適です。まだ夜行バスは乗っていませんが今年は3列シート（豪華）夜行バスに乗って旅行にいくことが目標です。

今年

4 病院放射線室室長

予防医療へのアプローチが

今年のキーワード

泉病院放射線室室長 山口さや香



明けましておめでとうございます。我が国では2025年問題が叫ばれています。放射線室も40歳の技師が一番若手という状況でしたが、一昨年より、30代技師、20代技師の人事異動が実現、職責にも若い世代を登用し、新生放射線室としてバリエーションアップしました！

2018年の「抱負」を考えると、まさに「新生放射線室」の真価が問われると受け止めています。

放射線室のこの10年間をみると、一番の転換期は脳外科縮小・撤退に伴い、脳卒中診療で重要な位置を占めていた脳血管撮影装置をダウンサイジングし、検査目的の嚥下検査へと移行、更に、脳血管障害患者減少に備え、変性疾患や認知症診療拡大による対応を目的に、脳機能検査（核医学検査）を開始し、技術転換を積極的に行なってきました。結果、今後の展望となる地域的な認知症診断連携や放射線専門医連携を実現構築してきています。

こうした経過の中で、今年は、従来以上に創意工夫、知恵の出し合い、過去に勝るとも劣らない職場スキルアップが要求されると考えています。ただ、色々と流動的要素は多く、具体的に抱負を挙げるとなると難しいのですが、増加する高齢者を対象とした老年医療に求められる画像診断の再定義、役割の創造・提案にあると思います。その中でも予防医療へのアプローチが今年のキーワードと考えています。当然、泉病院の強みである脳神経診療、リハビリ、脳健診などの特徴と今後の医療情勢に即した展開の延長線上に見える形で提案する必要があります。

「新生放射線室」として、これまで以上に、新たな他部門連携との創造、施設や地域への働きかけを通すなかで、キーワードの実現が抱負というところになるでしょうか。

困難な中でも、勉強熱心な若い世代に引っ張られ、年長の技師達もモチベーションが上がっている最中です。これからの放射線室をどうか楽しみにして下さい！

さわやかエッセイ

通所リハビリ利用者さん 送迎の醍醐味？

宮城厚生協会本部事務部長 佐々木利一



昨年の11月から本部事務局でお世話になっております。それまでの6年間はくりこまクリニック勤務でした。

「さわやかエッセイ」??? いくら考えてもテーマが思い浮かばず編集担当のIさんと相談。「栗駒の自然でも書いたら」の一言でふ～とヒントが浮かびました。

くりこまクリニックでは月曜日から金曜日までほぼ毎日朝夕の通所リハビリの送迎を行っていました。通所リハビリ利用者さんの送迎は職員みんなで分担、診療所ならではの光景です。

私の送迎コースは比較的遠方を「指定」され、片道20キロ～30キロ。クリニックのある岩ヶ崎地区は晴れていても、栗駒山のふもとと地区の文字村に入ると吹雪なんて当たり前のことでした。時間にして約1時間近くを新緑の栗駒山、紅葉の栗駒山、深い雪を頂いた栗駒山と季節を感じながらの送迎で楽しいひと時でもありました。

忘れられない方との会話

さらに楽しかったのは車内での利用者さん方との会話のやりとりでした。『栗駒山にまた雪が積もったね。今年は早いね』とか、春一番に咲くと言われる福寿草を見つけると『もう春が来たんだね』などの何気ない会話も、自分をその季節に溶け込ませてくれました。

そんな中で、忘れられない方との会話もありました。その方は当時90歳代後半の女性で、デイケアを楽しみにして「毎日学校（デイケア）に行くのがおれの楽しみなんだ」と言っていました。そして、よく80年以上も前の嫁いできた当時のことを話してくれました。

『どっからよめごにきたのしゃ?』、『栗駒山のふもとだ。歩いて行くと半日かかるんだ』。

たあいもない会話の中でも心を揺さぶられる会話もありました。結婚後初めてのお盆で実家に帰るとき、嫁ぎ先のお姑さんから『なんぼ泊まってくるのや、必ず帰ってこいよ』と泣きながら言われたと。そして、うんと優しくしていただいたお姑さんで忘れられないと話してくれました。

90歳を過ぎて『もうたくさん長生きしたから死にたい』と言うと、息子のお嫁さんから『「なんでそんなこと言うの」と怒られるんだ』、『いいお嫁さんなんだ』と話していました。

お姑さんからも大切にされ、お嫁さんからも大切にされ良い人生を過ごしてきたんだとほろりとさせられる時間でした。何回か同じお話しをお聞きしましたが、胸にしみ忘れられない会話となっています。

戦中、戦後を生き抜いてきた年代の方ですから人に言えない苦労も山ほどあったと思いますが、人からいただいた温かい気持ちはいくつになっても、何十年たっても忘れられないものだと思ひ出しています。



くりこまクリニックスタッフのみなさん